

『残酷な王と悲しみの王妃』

中野京子 著 集英社文庫 704円(税込)

ヨーロッパ政治史の裏にひそむ
血の通った人間の壮絶なドラマ

会員 田村 里佳 (72期)



ヨーロッパの人物名はどれもこれも似通った名前なので、受験時代、その暗記に頭を悩ませた方は少ないだろう。挙句、国同士が近接し、その勢力を争うせいで、国を越えて嫁ぎ嫁がれが繰り返され、王族同士は国を跨いで親戚である。イングランド女王なのにスペイン王の血も引くお前はなんだ、と、数百年経って我々が政略結婚に翻弄される有様だ。本書は、そうして世界史を嫌厭してしまっていた人に薦めたい一冊である。

本書では、タイトルのとおり、「悲しみの王妃」が、権力と女を欲する「残酷な王」に翻弄され、やがて無残に死んでゆく、そんなエピソードが五章に分けて綴られている。ヒロインである彼女らは熾烈な嫁姑戦争や妻愛人戦争を繰り返して、また、王と結婚したがばかりに悲惨な末路を辿る。

メアリー・スチュアートは、スコットランド女王の地位を保持しながらフランス国王妃でもあり、その美貌はヨーロッパ中に鳴り響いていた。まさしく少女漫画のヒロインである。だが姑を敵に回し、夫の死を契機にその栄華は瞬間に昔日のものへと変わる。最後には、父の従姉妹であるエリザベス一世により処刑される。バッドエンドだ。

エリザベス一世の母、アン・ブーリンは、王妃キャサリンの女官であった。しかし、ヘンリー八世に熱烈に恋され、三角関係はヘンリー八世と王妃キャサリンの離婚裁判にまでもつれこむ。恋の駆け引きの末、アン・ブーリンは、いわば愛人の身でありながら正妻のキャサリンを蹴落とす。だが最終的には、男児を産めず不仲になり浮気され、姦通罪を擦り付けられ処刑される。

やはりバッドエンドだ。

このように、かつて習ったヨーロッパ政治史の裏には、実は、愛憎と血に塗れた現代風のスキャンダルが隠れている。歴史に関心を持てなかった人でも、無味乾燥な史実の羅列が血の通った人間の物語に感じられ、俄然興味が湧いてこないだろうか。

絵画に関心を持っていない方にも、本書を薦めておきたい。絵画といえば、金持ち王侯貴族が権威の象徴として世紀の画家たちに描かせるものであり、壮絶なドラマを持つ王と王妃の話は、絵画抜きに語ることはできない。本書においても、折に触れて彼らの絵画が紹介されている。

マルガリータ・テレサに関していえば、本書の表紙にもなっているベラスケス画『ラス・メニーナス』——オリジナル・タイトルは『王の家族』——が挙げられている。この絵画の意図は何にあるのか、一説によれば、「マルガリータがスペインの正式な後継者だと、内外に知らしめる」ことだという。かつて日の沈まぬ国と称されたスペインにおいて栄華を極めたハプスブルク家、その後継者と目されていた少女の姿だと聞けば、その荘厳さに魅入られる。

余談だが、昨年の今頃大流行したゲーム「あつまれどうぶつの森」では、美術商のキツネが種々の名画を元ネタにした絵画を『〇〇なめいが』と名付け売っている。『ラス・メニーナス』も例外ではないが、そのアイテム名は『おごそかなめいが』。意外と的を射た命名だと感心してしまった。

本書を通じて歴史を紐解けば、きっと誰もが王侯貴族のドラマに魅了されずにはいられない。